

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』—ハイパーテキスト論考

0. 序論

現在文学理論において、〈間テキスト性〉という用語が大きな流れの一つとして存在する。その主張によれば、読むという行為は、我々をテキスト同士の相互関連の網の中に投げ込むことだ。そのような相互関連を辿ることこそがテキストを解釈すること、テキストが保持している意味や複数の意味を見つけ出すことなのだ。意味とは、あるテキストとそれが言及し関連を持っているほかの全てのテキストとの間に存在する重要な何か、ということになる。そうなった時のテキストが、〈間テキスト〉なのである。修士論文においては、『カラマーゾフの兄弟』を、1つの〈間テキスト〉として着目し、ドストエフスキー研究者達の研究書(テキスト)に留まらず、文学=哲学=歴史学=経済学=社会学等の学術的概念としては区分されているテキストをも包含した、考察及び論考を行いたい。修士論文の副題として、ハイパーテキスト¹という言葉を使用しているが、文学理論と結びついた用語としては、上述した〈間テキスト性 Intertextuality〉、〈超越テキスト性 Transtextuality〉(ジュネット)等が存在するが、日本においてはこれらの文学理論に関する用語が統一されていないようであるので、一般にインターネット用語として通用されているハイパーテキストという概念を用いている。

0-1. 論の流れ

本論文は、いささか個人的ではあるが、私が卒業論文執筆と同時に実行を目論んだ行為の失敗を動機としている。その行為とは、ドストエフスキーの小説世界を現実化しようという企てであった。

その反省を基に、今論文では、まず第一にドストエフスキーの創作のモデルとなった人物達についての研究を行い、その人物達の人生と、現実との差異を検証し、「ロマン的世界」

¹ ハイパーテキスト—コンピュータを利用した文書システムの一つ。文書の任意の場所に、他の文書の位置情報(ハイパーリンク)を埋めこみ、複数の文書を相互に連結できる仕組みのこと。

専用の閲覧ソフトウェアを使って文書を表示すると、リンクをたどって次々と文書を表示することができる。リンク機能を使って静止画や動画、音声、音楽など、様々な情報を一つの文書の中に埋めこむことができるシステムもある。

ハイパーテキストを応用した製品としては Apple 社の HyperCard などがある。インターネットを通じて構築されている世界規模の巨大な文書システムである WWW もハイパーテキストの一つである。

(<http://e-words.jp/a/E3838FE382A4E38391E383BCE38386E382AFE382B9E38388.html>)

という概念を用いて説明付けた。

また、人生において名の持つ意味に自分自身慄きながらも、作品における登場人物たちの名前の起源を探っていくと、農耕との関連性が非常に大きいものだった。この主題は、ドストエフスキーの創作目標の一つである、ロシアにおけるカンディードを創作するという目標との整合性があるように思われたので、その研究を行った。

というわけで、作品の1つの主題となっているこの農耕性の主題に着目していると、1860年代にドストエフスキーと、創作のモデルでもあるグリゴリエフが論陣を張っていた土壌主義というイデオロギー陣営が明らかになってきたために、土壌主義の研究を行った。

また、作品内で行われ、プロットを決定付ける贈与と、その贈与を正当化する神概念についての論考を行った。

この、贈与の媒介となる金銭は、作品内で大きく作用しているだけではなく、ドストエフスキー、グリゴリエフ等を支配し、当時ロシアの国家的な問題であり、いまや世界的問題ともなっており、農耕回帰の主題と、対立・均衡している。ゆえに資本主義との関連性について論じた。

また、作品内に存在する二項対立概念の解決として、ドストエフスキーはカラマゾフという概念を用いている。ゆえに、カラマゾフという概念についても論じる。

また、土壌主義等のイデオロギー的根幹であった西洋思想との関連性について研究をすすめていくと、ドイツ神秘主義思想の概念である無底概念が作品に影響を及ぼしていたために、無底概念や西欧思想との関連性について論じた。

1. 主人公のプロトタイプ研究

プロトタイプ研究とは、ドストエフスキーの創作のモデルとなった実在した人物たちに関する研究をさすものだ。このような研究に関しては、ロシアにおいては研究がなされているが、日本ではまだほとんど先行研究の紹介が存在しないので、今論文のテーマのひとつとして取り扱う。

1-1. ドミートリー=Аполлон Александрович Григорьев

ドストエフスキー研究史において、ドミートリー=カラマゾフのプロトタイプとして挙げられている詩人・作家・批評家であるアポロン=グリゴリエフの紹介。

1-2. グルーシェニカ=Агриппина Ивановна Меньшова

『カラマゾフの兄弟』における主要なヒロインの1人であり、ドミートリー=カラマゾフとのプロットにおいても重要な役割を示すグルーシェニカのプロトタイプについての研究。

1-3. 現実世界と小説世界との差異—「ロマン的世界」の成立

作品内におけるドミートリー=カラマゾフとグルーシェニカとのプロットと、実在上のモデルとして考えられるアポロン=グリゴリエフとアグリッピーナ=イワーノブナ=メニショバの実人生との間には、明らかに差異が見られる。この、作品のモチーフと実際

の作品の差異を「ロマン的世界」という概念によって説明づける。

2. 名前の意味論からの考察

作品内の登場人物の名前が持つ意味論から、いわばミクロ的な研究を行う。ちなみにドストエフスキーの諸作品に関する固有名詞の研究は、АльтманМ.С. БеловС.В. Charles Passage, 江川卓氏等比較的多くの研究者のテーマともなっているところだ。

2-1. ドミートリー=デーメーテル

ドミートリーというロシア語の名前の起源は、ギリシャの農業女神の名前であるデーメーテル Demeter をさしており、この農耕神と人間についての詩が、ドミートリーの告白の中で登場する。

2-2. グルーシェニカ=梨Г р у ш а

グルーシェニカの人名に関する В. В. Беляев.による研究を紹介する。

2-3. 農耕のメタファー（カンディード）

『ロシアのカンディード』を創作するというテーマはドストエフスキーの創作目標の1つであった。ヴォルテールの小説である『カンディード』と関連付けて、農耕への回帰という観点から作品を考察する。

3. ドストエフスキーと資本主義

本章では、『カラマゾフの兄弟』における金銭の占める作用、ドストエフスキー、アポロン・グリゴリエフにおける経済的問題、そして小説のテーマでもある農耕回帰と資本主義との関連性において考察する。

3-1. ロシアにおける農奴解放と資本主義

3-2. 金銭が作品の外面的プロットを支配

作品内重要な役割を果たしている金銭に焦点をあてて考察を行う。

3-3. 作家たちの実情

ドストエフスキーに、多大なる影響を与え、土壌主義のイデオロギーの根幹ともなったアポロン=グリゴリエフの有機的批評に関する考察。

4. アポロン=グリゴリエフ及び土壌主義Почвенничество研究

ドミートリー=カラマゾフのプロトタイプとして紹介したアポロン=グリゴリエフは、雑誌『ブレーミャ』において、ドストエフスキー等と、土壌主義と呼ばれるイデオロギー的陣営を形成していた。ゆえに土壌主義について概観する。

4-1. ロシアにおけるインテリゲンツィヤ

ロシアにおけるイデオロギー形成の土壌となったインテリゲンツィヤに関する考察。

4-2. ロシアにおける保守主義思想

この章では土壌主義発生の源泉である、19世紀ロシアにおける保守主義の発生についての考察。

4-3. グリゴリエフとドストエフスキーの交流について

4-4. 土壌主義の概念の起源について

4-5. 土壌主義の現象の本質

土壌主義の本質に関する考察

4-6. 土壌主義の4つの特徴

土壌主義の4つの特徴である哲学的標準主義、相対主義、内在主義、有機主義の4点についての考察。

4-7. 土壌主義についての総括

土壌主義に関するまとめ

4-8. 「大地」と「世界」

小説全体を支配する貨幣交換によるエコノミーを起点とするプロットと、農耕をシンボルとする大地回帰という2つの要素の対立と均衡について論ずる。

5. ドストエフスキーにおけるシェリング的問題

論者が修士論文で作品の登場人物であるドミートリー＝カラマーゾフのプロトタイプとして取り上げたグリゴリーエフは、五島和哉氏によれば、無底（бездна）という概念によって共通点を持っているという。この無底の概念は、ドイツ神秘主義思想にその源を発するわけだが、今回はドイツの哲学者シェリングに焦点をあてて、論考を行う。この無底に関する概念が、小説『カラマーゾフの兄弟』において、第一にいかにかにロシアに伝えられ、また、その後どのようにドストエフスキーに伝えられ、いかに解決されたかということについて考察してみたい。

5-1. ロシアにおけるシェリング受容

5-1-1. 定着の要因

シェリング研究の定着の要因について

5-1-2. ロシアにおける導入

以下に実際的にロシアにシェリングの思想が受容されたかということについての研究。

5-2. ドストエフスキーにおける間接受容

ドストエフスキーがシェリングの思想をいかなるかたちで、アポロン＝グリゴリーエフらから受け継いでいったかということに関する研究。

5-3. グリゴリーエフの有機的批評

ドストエフスキーに、多大なる影響を与え、土壌主義のイデオロギー的根幹ともなった、シェリングの影響を受けたアポロン＝グリゴリーエフの有機的批評に関する考察。

5-3. 無底の変容

5-3-1. 無底（Ungrund）概念

シェリングの無底概念に関する概説的説明

5-3-2. 無底（Ungrund）から無底（бездна）へ

神秘主義の無底概念である無底（Ungrund）がいかにロシアにおける無底（бездна）へと伝わっていたかということに関する考察。

5-4. 『カラマーゾフの兄弟』における解決

小説の最後は、「カラマーゾフ万歳！Ура Карамазову！」という少年達の台詞によって締めくくられている。この叫びは、人間を罪の共同体として包含した上で、それを礼賛するメタフォリックなドストエフスキーからのメッセージである。

6. カラマーゾフシナКАРАМАЗОВЩИНА

多義的でシンボリックかつ空間的で広大な、ソドムの理想とマドンナの理想の2つの深遠を包含する意味作用を形成しているカラマーゾフという概念について考察する。

6-1. マドンナ（聖母）の理想

作品内で二項対立概念として取り扱われているマドンナの理想に関する考察。

6-2. ソドムの理想

作品内で二項対立概念として取り扱われているソドムの理想に関する考察。

6-3. マドンナの理想、ソドムの理想両者の肯定

作品内において、この二項対立概念がいかに解決されたかという問題に関する考察。

6-4. カラマーゾフシナとロシアの大地の同一性

カラマーゾフという概念は、作品内において大地と結び付けられて登場する。このことから、カラマーゾフという概念を農耕回帰の主題や土壌主義とも結びつけて考察する。

7. 作品内における神概念の機能

文学テキストを題材として、贈与と自己所有化の過程における神の機能的役割及びその死の問題について取り上げる。ここでは贈与という社会的行為の際に神という概念が及ぼしうる機能に的を絞って論考を行う。

7-1. 贈与の問題

贈与行為が作品内でいかに作用しているか考察する。

7-2. 神の機能＝純粹贈与を可能にする

返礼を期待できない贈与を行おうとする際に神という超越的概念が果たす役割について考察する。

7-3. 自己所有化への帰結（神の死）

作品内で生じる、純粹な贈与とされていた行為が、その返礼を受け、自己所有化へと帰結するという過程をへて、機能を終える神という超越的概念に関する考察。

7-4. 超越概念に関する考察

テキスト内における超越的概念の論考。

7-5. 「愛」と進化ゲーム理論

文学テキスト内において重要な概念である「愛」という概念と進化ゲーム理論を比較対照として分析する。

7-6. 社会的様態に関する考察

社会学理論を用いた分析と考察。

7-7. 罪の意識の形成

今作品をテーマとして、人間の内面にいかに罪という概念が発生するかというテーマに関する論考と分析を行う。

8. 結論

修士論文では、自分の中で無数の問いを繰り返し、テーゼ、アンチテーゼ、アウフヘーベンを繰り返して論考を進めてきたが、この論文もまた、他者にとって見ればただのテーゼでしかありえないことは自明であるが、とりあえず以上が修士論文の骨子である。すなわち、**考え疲れた時点で結論となる（マッツの金言）**²。

主な参考文献

日本語

- 上田閑照編、「無底—シェリング『自由論』における」『ドイツ神秘主義研究』、創文社、1982年、
- ウオルィンスキー著、川崎侠訳、『カラマーゾフの王国』、みすず書房、1974年、
- 江川卓『謎解き罪と罰』、新潮社、1986年、
- 江川卓『謎解きカラマーゾフの兄弟』、新潮社、1991年、
- エリアーデ『大地・農耕・女性：比較宗教類型論』、堀一郎訳、未来社、1968年、
- 小沼文彦訳、『ドストエフスキー未公開ノート』、筑摩書房、1997年、
- 勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』、創文社、昭和36年、
- カント著、篠田英雄訳、『純粹理性批判』岩波書店、1961年、
- グレアム・アレン著、森田孟訳、『文学・文化研究の新展開：間テクスト性』、研究社、2002年、
- 五島和哉「ドストエフスキー創作中期における病気哲学の展開」
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~kazuya5/dostoevsky.html>
- ゴロツケル著、木下豊房訳、『ドストエフスキーとカント』、みすず書房、1988年、
- コンスタンチン・モチュールスキー著、松下裕、松下恭子訳、『評伝ドストエフスキー』、筑摩書房、2000年、
- 佐伯胖、亀田達也編、『認知科学の探求—進化ゲームとその展開』、共立出版株式会社、2002年、
- 佐伯啓思『貨幣・欲望・資本主義』、新書館、2000年、
- 坂庭淳史「ロシアにおけるシェリング哲学—その受容と展開について」『ロシア文化の森へ—比較文化の総合研究』、ナダ出版センター、2001年、p111～126、
- j. メイナード・スミス著、寺本英、梯正之訳、『進化とゲーム理論—闘争の論理』、産業図書株式会社、昭和60年、
- シェリング著、西谷啓治訳、『人間的自由の本質』、岩波文庫、1951年、
- ジョージ・カスパー・ホームズ著、橋本茂訳、『社会行動—その基本形態』、誠信書房、1978年、

² アーサー・ブロック著、倉骨彰訳『マーフィーの法則』、アスキー出版局、1993年、P80、

新睦人、三沢謙一編、『現代アメリカの社会学理論』、恒星社厚生閣、1988年、
 竹田青嗣『エロスの世界像』、講談社、1997年、
 田中克彦『名前と人間』、岩波新書、1996年、
 ツゥルナイゼン著、丸川仁夫訳、『ドストエフスキー文献集成10巻ドストエフスキー研究
 一弁証法神学より観たる一』大空社、1995年、
 中村健之助編訳、『ドストエフスキーの手紙』、みすず書房、1988年、
 日本聖書教会編、『聖書』、1995年、
 橋本茂、『交換の社会学—G.C.ホーマンズの社会行動論』、世界思想社、2005年、
 橋本崇、『偶然性と神話：後期シェリングの現実性の形而上学』、東海大学出版会、1998年、
 ピーター・M.ブラウ著、間場寿一[ほか]訳、『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜
 社、1974年、
 藤瀬浩司著、『資本主義世界の成立』、ミネルヴァ書房、2004年、
 マルセル・モース著、有地享訳、『贈与論』、勁草書房、1962年、
 ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳、『ドストエフスキーの詩学』、筑摩書房、
 1995年、
 望月哲男「グリゴリーエフとドストエフスキー—土地主義の土壌」文集『ドストエフスキ
 イ』第二号、1981年、
 望月哲男「有機的批評の諸相—アポロン・グリゴリーエフの文学観—」『スラヴ研究』(no.37)
 1990年、
 山崎時彦『保守主義の生成と発展—政治思想史』、昭和堂、1984年、
 湯浅博雄『聖なるものと永遠回帰』、ちくま学芸文庫、2004年、
 湯浅博雄『現代思想の冒険者たち11、バタイユ、消尽』、講談社、1998年、
 湯浅博雄『他者と共同体』、未来社、1999年、
 吉村善夫、『ドストエフスキイ～近代精神超克の歴史』、神教出版社、1965年、

英語

Walter Kaufmann, *Existentialism from Dostoevsky to Sartre*(New York:Meridian Books, 1989)

Charls Passage, *Character Names in Dostoevsky's Fiction* (Ann Arbor,Michigan: Ardis Publishers 1983)

Geoffrey C Kabat, *Ideology and imagination : the image of society in Dostoevsky* (New York : Columbia University Press , 1978)

Heinrch Stammeler, "DOSTOEVSKY'S AESTHETICS AND SCHELLING'S PHILOSOPHY OF ART", *Comparative literature* Vol. 7 (winter 1955) (Eugene: University of Oregon, 1955) pp,313-323

Robert L Belknap, *The Genesys of the Brothers Karamazov* (Evanston:Northwestern University Press Studies of The Harriman Institute, 1990)

Robert L Belknap, The structure of the Brothers Karamazov (Evanston:Northwestern University Press, 1989)

Wayne Dowler, Dostoevsky, Grigorev, and native soil conservatism (Toronto Buffalo : University of Toronto Press, 1982)

露語

А.Григорьев. Лителатурная критика. С.171–172

А.П.Осроват. заметки о почвенничество // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том4. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.С.168-173

А.П.Осроват. К ИЗУЧЕНИЮ ПОЧВНИЧЕСТВА // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том3. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.С.144-150

А.Я. Шайкевич, В.М. Андриященко, Н.А. Ребецкая. Статистический словарь языка Достоевского. Москва. Языки славянской культуры. 2003.

Б.Н.Белопольский. Достоевский и Шеллинг // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том8. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.39-51.

Б.Ф. Егоров. Аполлон Григорьев. Москва, Молодая гвардия. 2000.

В.В.Беляев.Имя грущенька в Братьях Карамазовых как антропоним // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. том10.стр.176-181.

В.Е.Ветлофская. Идеал мадонны в Братьях Карамазовых // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том15. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.305-326.

В.Г.Селитренникова,И.Г.Якушкин. АПОЛЛОН ГРИГОРИЕВ И МИТЯ КАРАМАЗОВ //М-во высшего и среднего специального образования СССР. Научные доклады высшей школы. Филологические науки1(49). Москва. Высшая школа. 1969,1. С.13-24.

Гроссман.Л.П. Семинарий по Достоевскому. М.Петроград. Государственное издательство. 1922.

И.Д.ЯКУБОВИЧ. Братьях Карамазовы и следственное дело.Д.Н.Ильинского. //сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том2. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.119-124.

Л.М.Рейнус. О прототипе Грушенки из Братьев Карамазовых // Русская литература 1967но4 . Ленинград. Изд-во Академии наук СССР. 1967. С.143-146

Николай Бердяев. Миросозерцание Достоевского. Прага. 1923.

Николай Николаевич Наседкин. ДОСТОЕВСКИЙ энциклопедия. Москва.

Алгоритм. 2003

Николай Подосокорский. ЧТО ТАКОЕ «КАРАМАЗОВЩИНА»? // Достоевский и мировая культура. Общество Достоевского. Московское отделение Общество Достоевского. Комиссия по изучению творчества Ф.М. Достоевского Института мировой литературы им. А.М. Горького РАН- No. 14 .Москва.2001.С.304-314

Ф.М. Достоевский Полное собрание сочинений в тридцати томах. глав.ред. В.Г. Базанов, Ленинград, 1972-1990.

Фридрих Вильгельм Йозеф Шеллинг. Сочинения в двух томах. Москва. Изд-во "Мысль". 1987.

Ю.Д.Левин Достоевский и Шекспир //борник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования том2. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-.

独語

F.W.J.Schelling, Werke.Hrsg.v.K.F.A.Schelling,Stuggart,1856-1861VII、

仏語

Georges Bataille, *L'histoire de l'erotisme, La Part maudite générale, tomé II*, OEuvres completes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard, 1976.

Rene Girard, *Le bouc emissaire*. (Paris. B. Grasset. 1982).

Roger Caillois. *L'homme et le sacre* Ed. augm. de trois appendices sur le sexe, le jeu, la guerre dans leurs rapports avec le sacre. (Paris. Gallimard, 1950).

補足. 『カラマーゾフ兄弟』 あらすじ

十九世紀の半ば過ぎ、ロシアの田舎町に住む強欲で無信心で淫蕩な地主フォードル・カラマーゾフの家に父親にほうり出されてよそで育った三人の息子が帰郷する。先妻の子のドミートリイと、後妻の子のイワンとアレクセイである。なおそこには町の白痴の娘に生ました隠し子のスメルジャコフが料理番として住みこんでいる。

ドミートリイは自分の遺産を横領した父と、町の商人の妾グルーシェンカのことで張りあい、いいなづけカテリーナから送金を頼まれていた三千ルーブリを二度にわたってモークロエ村でグルーシェンカと遊んで使いはたし、彼女の愛情を勝ち得る。2度めの豪遊の直前、グルーシェンカを捜しに行ったドミートリイは父の家で下男グリゴリーを誤ってなぐり倒して気絶させてしまう。かねて主人に深い恨みを抱いていたスメルジャコフはイワンの「すべては許される」という虚無主義的な考えに惑わされて、その晩癲癇の発作を利用して主人を殺し、金を奪って、その罪を巧みにドミートリイに転嫁する。ドミートリイは恋が成就した瞬間に嫌疑を受けて逮捕され、裁判に付される。イワンはスメルジャコフに教唆したという罪の意識から発狂する。発狂寸前に法廷に立った彼はスメルジャコフにその前日自白させて取り戻した金を証拠に提出して兄を救おうと自分の教唆の罪を自白するが、被告に恨みを晴らしたいカテリーナの反証が物をいい、名弁護士奮闘も空しく被告はシベリヤ流刑を言いわたされる。³

³北垣信行訳、世界文学全集19、講談社1968年、…しおりより 全文引用